

## はじめに

筆者は天理参考館に勤務する学芸員である。さすがに最近はなくなってきたが、以前は職業欄に「学芸員」と記すと、「これはどういうご職業ですか？」と言葉遣いは丁寧ながら、胡散臭そうに質問されたことが何度かある。「キュレーター」と称すると一気に華やかなイメージになるが、要は博物館の職員である。展示会を企画し、展示室に資料を並べ、その図録を執筆作成する。その前に日々地道に資料を登録し、調査し、研究しなければならない。

天理参考館は博物館である。正確を期するならば、昭和26年(1951)に制定された「博物館法」という日本国の法律の上では、博物館相当施設に当たる。登録博物館と博物館相当施設がわが国では“博物館”ということになるので、案外周知の博物館が“博物館”でなかったりする。身近な館を調べてみるのも面白いだろう。

『Glocal Tenri』創刊号の巻頭言には、グローバリズムとローカリズムを橋渡しした概念をグローカリズムと呼び、前者を地球主義、後者を地域主義とすれば、地域と地球の二つを一つにした地域地球主義に立つ“二つ一つ”の天理”が本誌を現すということが書かれている。また、「建学の精神の中核をなす海外伝道」と明記されている。グローカリズム～ローカルとグローバル～を一番体感できるのが、この博物館という存在ではないだろうか。昭和5年(1930)に海外伝道を目指して創設され、今日約30万点の資料を有する世界の生活文化と考古資料の博物館が、一地方都市天理に、私立で、大学附属施設として存在する意義を本誌で紹介することは相応しいであろう。館の歴史と有数の館蔵品を順次紹介していきたい。

## 参考館という名前

館蔵品を紹介する前に、まず「参考館」という名称から説明を始めたい。「天理参考館」と名乗ると、相手が博物館関係者でない場合、ほぼ全員から「あら、博物館じゃないんですか？」と聞き返される。先述の通り、天理参考館(以下、当館と称す)は立派な“博物館”である。博物館相当施設は博物館法上の博物館(登録博物館)に準じる館であり、所在する都道府県の教育委員会の指定を受けなければならない。因みに東京国立博物館も博物館相当施設である。当館も昭和31年(1956)という制定から早い時期に指定を受けている。真柱室長であった堀越儀郎氏が『天理参考館四十年史』(天理大学附属天理参考館編1973)のなかで、「博物館法は昭和26年に制定せられたが、それは現在伊勢神宮の大宮司をしている徳川宗敬氏等が熱心に唱道されて出来たのであるが、同氏の話しでは、国立の博物館は立派なものであるが、民間では貴教の参考館のようなものを育てたいと思うので、貴教の参考館を頭に描きながら博物館法の制定に力を入れたというおられた」と逸話を紹介している。

現在当館の他に「参考館」と称する博物館には、海上自衛隊の教育参考館(広島県)や、濱田庄司記念益子参考館(栃木県)などがある。「参考館」は明治23年(1890)に東京上野で開催された第3回内国勸業博覧会のために建設された煉瓦造りの建物に付された名称で、他に「美術館」「園芸館」「農業館」などの建物も見られる。このとき「参考館」では海外の最新技術が紹介

されている。その後、同様の名称の施設は全国各地に広まった。そもそも「博物館」という単語も、万延元年(1860)遣米使節団一行がワシントンD.C.の Smithsonian を見学した際に通詞が MUSEUM を訳したのが最初で、日本語として定着するのは明治以降のことである。この使節団の護衛として咸臨丸に乗り込んだのが勝海舟、福澤諭吉、ジョン万次郎の面々である。明治になって「百物館」、「究理ノ館」などの候補を抑えて「博物館」に落ち着いたのは、このときのメンバーの福澤が、大ベストセラーとなった著書『西洋事情』(1866-1870)のなかで西欧各国のこの文化施設を、「博物館」として詳しく紹介したからに他ならない。

第二次世界大戦以前からの歴史を有する日本の主な私立博物館として、大正6年(1917)大倉集古館(東京)、大正7年(1918)アチック・ミュージアム(東京)、昭和5(1930)年大原美術館(岡山)、昭和9年(1934)白鶴美術館(兵庫)があるが、各々名称も成り立ちも性格も実に多彩である。大倉喜八郎は日本の古美術品流出に危機感を覚えて大倉集古館を、渋沢敬三は郷土玩具を中心に生活資料である民具を研究対象としてアチック・ミュージアムを、大原孫三郎は近代美術を展示するわが国初の美術館として大原美術館を、嘉納治兵衛は東洋古美術に対する熱意から白鶴美術館を、それぞれ創設した。そして中山正善は昭和5年に支那風俗展覧会を開催して、これが今日約30万点の資料を有する世界の生活文化と考古資料の博物館である当館につながっていくのである。上記の5名はいずれも先取の気質に富んだ賢人であるが、当初から公開を前提として、教育に資するためという明確な目的を有していたのは中山正善だったであろう。このとき25歳。当館の英訳は“Tenri Museum”ではなく“Tenri Sankokan Museum”である。少し長くなるが、「参考館」という名称に思いを込めたことが窺える創設者の発言を引用して、初回の筆を置きたい。昭和5年3月4日から4月5日にかけて行われた中国方面巡教に通訳として随行し、民俗資料の収集にあたった平岩房次郎天理外国語学校教授に向けられた言葉である。



「平岩君、うちの外语は、海外に出る布教師を養成する学校だ。教室で講義する場合、その土地その処の言葉は勿論、風俗、習慣又は日々の生活上使用するもの等についても説明するはず

『農商務省御許可 第三回内国勸業博覧会会場案内』(部分) 明治23年 明廣社(当館蔵品) 中心となる帝国博物館(現在の東京国立博物館)の建物とつながっているのが「参考館」の建物

だ。その場合、口で如何に上手に説いても、又巧みに絵にかいても、所詮、実物を見せるに及ぶまい。これからの旅先きで、実生活に則したもの、珍しいもの等、可能な限り多くの参考資料を買入れて持ちかえること。これがきっかけとなって、将来立派なものが生まれて来るかも知れない。」(平岩先生謝恩会編『平岩先生と中国語教育』1969より)